

ミオヤの光



不斷光の巻

ミオヤの光

休刊謹告

拜啓陳ればミオヤの光は昭和十年一月より暫く休刊に致し候間乍恐左様御含置きくだされたく何れ續刊の時には前以つてハガキにて御通知申上候間それまでは休みのことに思召し被下度願上候

拜具

昭和十年二月二十八日 印刷發行

發行兼印刷人

小石川區水道端二ノ四四

山崎

辨成



御遺文

不斷光

靈化菩提心

意志の信仰を菩提心と爲す。これ實行信仰にして 不斷光に靈化せられて阿彌の聖
意實現として活動行動す。正に心情に於て阿彌の真我の中に安立し 平和なる寂靜な
る自己の靈福を内面に感ずるも 猶進んで 神聖正義にまた恩寵より靈化せる意志と
して實行を爲すにあらざれば 未だ眞の聖意に協力せしものといふ可らず。此靈化菩
提心とは この阿彌の目的に協つて活動する聖意なり。

消極積極

心情に世界依屬を超えて阿彌の絶對真我に依屬すると同じく 意志も天然意志の屬
性たる方に於て轉化せざる可からざる方あり。

世俗情操と娑婆執著と利己主我とは 菩提心には不適當として捨離せざるべからず

二

阿彌の目的なる無上道心として 阿彌の個人的活動するは 消極には一切の無上道
を阻害するものを除き 積極には阿彌の理想に活動す。菩提心に 意志の不道徳は
自利に依て脱却し 菩提心は力行に依て増進す。

世俗情操利己主我を離れて 無上道心開展して 隨前の憂なきに至れば 即ち不退
轉の無上道心と爲る。即靈化の意志なり。無上道心と云ふも 至高善神智態道徳態に
外ならず。世間倫理の道徳も形式には異なるなきも 其内容の動機に於て異なるのみ。

實に能く自己離脱して神的靈化の意志は菩提心と爲る。世間倫理の動機は世俗情操
にして野卑無上道心は高等なり。

天然教に所謂の道徳は其情操と動機に於て世俗たるを免れず。唯青史に記せらるるを
目的と爲すが如きの主我は程度卑しと謂はざるべからず。天然の人には世俗的情操は
所謂人情的道にして 其情操野卑にして 其根底の人情を出る能はず。期する處名を
後世に貽すと云ふ如きの動機を超えず。道徳其ものゝ卑しきにあらざり 其人の情操が
卑賤なるなり。次に聲聞。

次に進んで天然を超越して 世俗動機を出で獨り超然として高く物表に出で 情操
高きこと山の如く志節皎潔にして雪の如く 五欲に對して蛇蝎の如きも 消極の一片
のみにして自調自度以て佗を顧るなし。自ら獨り三界を超えて無爲に到らんが爲に
道諦を修するものは聲聞これなり。三界を超え世俗を絶たる道情も利己主義にして
絶對阿彌の中に立ちて一切衆生と同じく同一の目的に活動することは未だ曾て夢にも
見ざる所 是また大菩提心の甚だ排除すべき情操なり。

次に大乘相宗定性の菩提心も超然主義にして 圓滿なる菩提心道情は立つべきもの
に非ざるなり。何となれば 相宗は五性相待の上に立てる根底なればなり。

眞の無上菩提心とは主我を超え世界規定の天然規定を超え 阿彌の中に至つて 阿
彌の個人として其目的に活動して 始めて其の無上道心と爲すべし。主我と幸福主義
は大に擯斥すべき道情なり。論註に無上道心發せざれば 阿彌國に入る能はず。若し

一

三

人無上道心を發さずして 但彼國土の受樂無間なるを望みて 樂の爲の故に生ぜん
と願せば亦當に往生を得ざるなりと。の如き事を貪る幸福主義は世界動機の野卑なる
道情にして 其意志が阿彌の聖意とは性質が異なることなれば往生を得ざるなり。殊
に大に誤謬する處は 天然の幼稚なる道象より 苦樂野卑の生理規定と及び主觀にあ
りて 客觀の反寫するなるを識らず。主觀は天然の幸福主義にして 客觀にのみ快樂
を渴望する如きは 阿彌の性を去ること違し。先づ自己の主我と幸福主義 此動物
生活の慾情動物祖先の世襲的情欲を打破して 理性的精神的道情を發達せしむるなり
阿彌の理性を以てすべて全精神生活を統括するに至るべし。

人心道心の中 人心なる人的情操を打破して 勇を奮ひ意志を鞏固にして 道德的
力行の修練より 益精修して 阿彌理想を現實せんととの神的欲望より 漸次に修習
終に鞏固たる性格が阿彌の聖意の個人現たる道德 之を無上菩提と名づく。完全圓滿
なる道德情操にして あらゆる道德情操の最高等に住す。

此道德的情操は表面は個人の如くなるも 其内面は絶對無上道意と致一し 形而上
論の無碍光の個人活動に外ならず。

無上菩提心

無上道意とは阿彌の一切慧一切能の性能にして 個人に實現して人の發菩提心と爲
る。内面致一の故に此道意より阿彌の内容に向つては益々其目的に無限の進歩せんと
欲望するは上求菩提といひ 一切の衆生は阿彌の理性たるを自ら意識せずして 自ら
惑ふて沈淪せんとするを 種々方便をもて自己と同じく阿彌の内容に歸入せしめんと
欲するを下化衆生と云ふ。論註に此無上道心即ち願作佛心なり願作佛心即ち度衆生
心度衆生心即ち衆生を攝取し有佛の國土に生ぜしむる心なり。是故に安樂に生ぜん
と欲する者は 要す無上道心を發すべしと。願作佛心とは上阿彌の目的に協力し 度衆
生とは阿彌の理性内の衆生を悉く阿彌内容に開展して歸入せしめるなり。有佛の國土

に生ずと云ふも 身死して後入と云ふに非ず 意志の轉依を生とす。論註に人よく阿
彌の法身を意識すれば 世界の衆生は虛妄あることを識る。しかれば衆生は理性あり
ながら妄の方面のみに迷ふ哀むべし。依て慈悲が生ず。又眞實の法身即ち理性を知れ
ば眞實に阿彌に歸依が起る。衆生の虛妄を知れば慈悲が起る 一方には歸依が起るに
依て上に歸依して下に慈悲ある故に方便回向とす。菩薩は阿彌の聖意たる一切の功德
を施すも自身利己幸福主義に非ずして 聖意實現として 一切衆生の惡素質を抜いて
自己と同じく阿彌中に開展して 歸趣せしめんことを欲望す。彼の國土の樂を聞きて
自己快樂主義は阿彌に入る能はず。阿彌の理性に協ふには一切衆生と同じく終局に歸
せんと欲して一切の集むる所の功德を一切と共に佛道に向ふなり。

方便とは菩提即ち己の智慧の火 即ち阿彌の慧恩寵開展を以て一切の衆生の煩惱の
草木を燒かんに 若し一切衆生として成佛せざるあらば我作佛せず。

然らば衆生未だ悉く成佛せざるに菩薩已に成佛は即火燄を以て草木を燒て 悉く燒
盡さんと思ふに 草木未だ盡さるゝに火燄已に盡るが如く 其身を後にするに身は先
だつが如し。故に行方便と名づく。今同じく。火燄は菩薩なり火は阿彌の行ゆる法界
に徧して 之に歸するものとして信機開展して感亡せざるなし。方便とは一切衆生を
攝取して阿彌内に更生せしめんと願望す。

遠離三種 一智慧門に依て自業を求めず 我心の自身に貪著する意像を捨てよ 知
に依て幸福主義は眞理に非ざるを知り求めず。慧に依て主我を捨つ。

二慈悲門 一切衆生の苦を抜て 衆生を安んずる心なきを遠離せよ。慈に依て衆生の
苦を抜き 悲によつて衆生を安んずる無き心を離る。

三方便門 一切を憐まぬ心と自身を供養し恭敬する心を遠離す。

已上約して云はゞ幸福主義と主我執とは聖意に適せざる故に脱せよ また一切に於
て神的同情ならざるべからず。

三種隨順菩提門

八

一無染清淨心 自樂を求めず菩提の無染清淨心に神的活動す。二安清淨心一切の抜苦を以て 菩提は一切衆生最終安寧の處一切の苦を抜いて阿彌安寧に攝取せしめざるべからず。若し之を作さざれば菩提に違す 之を作すが故に順ずるなり。三樂清淨心一切をして菩提を得せしむるを以ての故に衆生を攝取して阿彌に歸入せしむるが故に菩提は畢竟常樂の處若し衆生をして畢竟常樂我淨せしめざれば 即ち菩提に違ふ。畢竟安樂を得るは大乗門に依る 即ち安樂佛は是なり 又攝取衆生彼國土故に之を三種隨順菩提門と名づく。

智と慈悲即ち解脱方便の致一 智慧とは佛智見啓示によりて 自己を解脱して真我の中に融合して 佛の慈悲と致一し 解脱によりて天然の自我と幸福主義を超越したり。唯解脱のみにて之に安んぜば幸福主義たるを免れず之より進んで阿彌の目的に活動すべき天職を果さざる可らず。然れども啓示によるにあらざれば知見の眼なくして菩提の正道いかにして進むことを得べけん。自ら未だ解脱せざれば天然の苦惱を解脱すべき理性あるを識らざればいかにしてまた他に普及する意志を發すことあらん。解脱して初めて聖意實現して行動し他をも自己と同じく攝化せらるべきことを知りてまた他に及ぼす。

註に知見と慈悲方便との三は 般若より達する慧方便は權に通ずる知の稱なり。如に達すとは内面に阿彌に致一し 權に通ずるとは客觀の衆生の機を省み備に應じて無碍なり。智慧は衝動より方便して 衆生を度すために活動す 智慧欠けば度生の道德衝動もあるなし。

亦表面には神的活動止まざるも 内面には阿彌の中に安住して寂靜として照る 故にいか程神的活動はげしくも内面の寂靜を失はず。同時にたとへ阿彌の常寂光土に安住するも 外に聖意實現の活動を發す。故に般若と方便とを失はずと。悉く其阿彌の

九

主觀客觀兩界の顯現に外ならず。般若と方便とに依らざれば 菩薩の法成就することなし。若し智慧なく即ち啓示によつて阿彌の内容に歸一せざれば 即ち轉倒に墮せん若し方便なくして 阿彌の内面致一に解脱せば 即ち實際を證するも單に解脱に安んじて幸福主義に墮落すべし。

主我幸福利己は 菩提心を障ふ。世間に障碍の相多し 風は靜を障へ水は火を障へ五逆十惡は人天を障へ四倒は聲聞果を障へ 此三種は菩提心を障ふ。

主觀が自己阿彌の終局目的に活動するは 向上門即ち往相なり次に客觀界に神的活動して 菩提の行爲他を攝化するは 還相また向下と云ふ利他なり。所謂大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察して 生死の煩惱の林に入り阿彌の實現として衆生を化す之を還相と名づく。無上菩提即阿彌目的は世界に遍在して 一切を終局に攝化せしむる性能力なれば 人がこの大勢力に致一するを發菩提心と名づく。この無上道態は絕對なれば 一切衆生同一の理性が最深に具有す。依て自己の如く一切をして 悉く攝化せしめんが爲に方便活動するを利他と名づく。自利利他ともに同一阿彌の性能の主觀客觀の兩界に實現したるに外ならず。故に註に無上道とは此道理を窮め性を盡して更に過るものなし 正は聖智法相なり法相無相の故に聖知は無智なり。亦正論智とも云ふ一聖知徧く一切の法を知る 二法身徧く法界に徧し若しは身若しは心徧せざる處なし。道とは無碍道なり 註に云く十方無碍にして一道より生死を出づと。一道とは無碍道。

無上菩提心とは 約して云へば消極には天然の自我と幸福即ち快樂主義は人情的にして情操野卑なれば 金が鑛垢ある如し 人の天然人情的垢質を除きて超然たる高尚の理想となる。また聲聞主義とは天然を超え 消極的にして利己主義阿彌の偏眞に歸入して 聖意實現の智能を知らず 故に超然主義の菩薩は時間的に阿彌を遠く三祇の後にあざれば致一せず 又は空間的十萬億土を経ざれば 融合する能はず。況んや其實現的活動をや

一〇

圓具教では絶對阿彌の一切智能の性能中の衆生なれば 天然の主我及すべてに適せざる垢質脱却すれば即ち阿彌の理性より聖意實現して理想的に目的中に活動し 自己の意ならず 同一理性の阿彌の個々なれば自他の差別なく 同じ慈悲を以て自己の阿彌彼を照し彼の阿彌是を誘ひ 主客同一の大道態終局絶對に歸入す。然れども其本體は無窮に常に活動する無上道態なり。

昭和九年十二月二十八日 印刷
昭和九年十二月三十日 發行

(誌代年壹圓)

編輯兼 發行 人 山崎 辨成

小石川區關口町六十五番地

印刷 人 小林 七太郎

小石川區關口町六十五番地

印刷 所 靜文社 印刷 所

電話 牛込五四一九番

東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社

振替口座東京六六八五一番

辨榮聖者略伝

大ミオヤの無盡の大悲に催ふされて、此の土に輝き出て給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下総国鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。

家に在りて農事に励み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀尊を空中に想見して憧憬の念に堪へず、つひに明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雑用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜断え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。疾に一切経を讀了し、東京に遊學して叵山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧円かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の暁には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全く佛法に相応し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康上人の意を継いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家に夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁を積んで蒲團となし、超然として勇猛に稱名し給ふ。建立寄附も一人一厘の結縁として遠近を行脚中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給ふ。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては即座に追恩別行に入つて不臥念佛一百日に及び給ふ。明治廿七年印度に渡りて大聖釋尊の御蹟を巡拝し、帰朝しては東西に巡教し阿彌陀經図繪を施し給ふこと廿五万余部、善く米粒名号を施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふこと実に無数、

難化の有縁一人の爲にも数年方便して猶措かず、寺の禮遇を辭り態々下男室に夜を明して勸化の縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては当日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如来の大悲を喜びあひ給ふ。日毎夜毎の伝道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如来の尊像教化の御文に筆を運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚その奉謝の金は悉く会堂の創建となり學園の創立となり数万の文書数十万の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科學に至るまで孜々として研め給ひ又畫、歌、音楽、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈応内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、実に一寸の光陰も為すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の処、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶穌教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光り万民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾万皆悉く值遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ超えて大正九年吹雪に更くる北越の夜寒身に泌む勸化の旅に老いの御聲に盡きぬ如来の御慈悲を伝へて最後の三昧會を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。

仰ぎ惟れば内證甚だ深く外用亦廣大に全分度生の無我の力が無作の精進に顕れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如来光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈応を仰がざらむ。誰か光明の撰化を信ぜざらむ。

木又謹誌